

[研究ノート]

19世紀ドレスデンの混声合唱協会の演奏レパートリー

「ドライシヒ・ジングアカデミー」を例に

井上 登喜子

1. はじめに

近代市民社会の発展に伴い、18世紀末から19世紀前半にかけて、ドイツの諸都市ではさまざまな音楽制度が整えられ市民の音楽生活を拡充していった。なかでも合唱協会は重要な音楽制度のひとつに数えられるが、特に本稿では、市民的な演奏会活動を確立する過程で重要な役割を担った初期の混声合唱協会について考察する。

概して、混声合唱協会は、社会階層と音楽的趣味を共有する市民が有意義な余暇を過ごすために集い、歌の練習と社交を通して自己の教養を高めるという私的で閉鎖的な目的を持つ一方、演奏会を催すことで都市の公の音楽生活にも貢献した。公的な演奏会では主にオラトリオや大規模な合唱作品が歌われたが、その中で人気を博した作品や高い評価を得た作品は繰り返し演奏され、合唱協会のレパートリーを形成していった。

この小論の目的は、このような演奏レパートリーの形成を調べるために、ザクセン王国の首都ドレスデンで最初に設立された市民の混声合唱協会「ドライシヒ・ジングアカデミー Dreyssig'sche Singakademie」を対象とし、19世紀初頭から世紀末まで約90年間の公開演奏会で歌われた作品群のデータからレパートリーの傾向を呈示することにある¹⁾。

2. 「ドライシヒ・ジングアカデミー」について

ドレスデンは宮廷オペラを核とする、ヨーロッパにおける音楽文化の中心地のひとつであった。しかし、この宮廷音楽の優勢ゆえに、そして

政治的に保守的な政府の官庁所在地において解放的な中産階級の勢力が弱かったために、市民的な音楽制度の確立が遅れていた。このような状況のもと、1807年3月5日、初代指揮者となる宮廷オルガン奏者ドライシヒ Anton Dreyssig(1776-1815)の名を取った混声合唱協会「ドライシヒ・ジングアカデミー」が初めて設立された。協会創設を促したのは、他都市で1770年代に始まったヘンデルのオラトリオ受容や1786年のヘンデル生誕百年祭、そして1791年にファッシュ C.F.C.Fasch(1736-1800)が設立した「ベルリン・ジングアカデミー」であった。

「ドライシヒ・ジングアカデミー」は、当地の音楽家を含む教養市民層を中心メンバーとする市民的な制度であったが、王家一族や貴族、政府の高級官吏層とも親密な関係を保っていた²⁾。また、規約には「合唱音楽の養成によって、より高い音楽的教養のための感性を高め」、「あらゆる時代の宗教的でまじめな作品を演奏する」と記されており³⁾、この活動目的はメンバー構成等の組織的特徴と並んで、模範とする「ベルリン・ジングアカデミー」に類似している。

1813年12月のハイドンの《天地創造》を皮切りに、定期的なオラトリオ演奏会を催すようになり⁴⁾、4代目の指揮者である宮廷オルガン奏者シュナイダー Johann Schneider(1832-57在任)の下で活動は隆盛を極めた。演奏会ではヘンデルのオラトリオを次々と紹介し、1839年3月にはベートーヴェンの《荘厳ミサ曲》のドイツ初演にも携わった。また、1833年以降、宮廷楽団の「枝の主日のコンサート」に定期的に参加し、1846年4月5日、当時の宮廷楽長 R.ワーグナーの下でベートーヴェンの《交響曲第9番》の演奏を行なっている。このような初期の活動において、「ドライシヒ・ジングアカデミー」はドレスデンの音楽生活を担う唯一の市民的な合唱協会であった。

1830年代半ばから48/49年にかけて、市民による合唱協会設立が盛んになったが、創設された団体のほとんどは男声合唱協会であった⁵⁾。作曲家シューマンが1848年に設立した「合唱協会 Chorgesangverein」(後に「シューマン・ジングアカデミー Robert Schumannsche Singakademie」と改名)は、数少ない混声合唱協会の一つであった⁶⁾。1870年代後半から、「ドライシヒ・ジングアカデミー」はこの「シューマン・ジングアカデミー」等の混声合唱協会と共に、聖母教会や三王教会といったドレスデンの主要なルター派教会で、「悔い改めの日」のオラトリオ演奏会を開催するようになった⁷⁾。

以上のように、「ドライシヒ・ジングアカデミー」は、初期の活動では宮廷楽団と協力関係を保ちつつ公開演奏会の育成に貢献し、さらに1870年代後半以降は、それに加えて、ルター派教会で催したオラトリオ演奏会によっても公の演奏会活動に関わった。次節ではこれらの演奏会で歌われたレパートリーについて考察する。

3. 演奏レパートリーの考察

グラフ1は、1812年から1901年の公開演奏会で歌われた約800曲の作品を作曲家ごとに区分し、その推移を10年単位で示したものである。このグラフは、合唱協会の会員によって執筆された活動の歴史的記録である記念刊行物(DS1882、DS1907)や、個々の演奏曲目リスト(DS1834、56-57、65-70)等の資料を基に作成した。これらのデータから判明する「ドライシヒ・ジングアカデミー」の演奏レパートリーの主な特徴を以下の4点にまとめる。

① ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの受容

「ドライシヒ・ジングアカデミー」の初期の演奏会(1812年から20年代)において、ハイドンの《天地創造》、《四季》、幾つかのミサ曲とモーツァルトの《レクイエム》は繰り返し演奏された⁸⁾。ベルリンやライプツィヒと同様に⁹⁾、当時ドレスデンでも両者の作品が既にレパートリーとして受け入れられていた。ハイドン作品は19世紀末まで、モーツァルト作品は70年頃まで安定したレパートリーを形成したが、両作曲家の作品の持続的演奏は、当協会の音楽的好みの保守的な側面を示している。

ベートーヴェン作品の受容は、《オリーブ山上のキリスト》(1824年)で始まり、32年に《ミサ曲ハ長調》、38年に管弦楽伴奏付きカンタータ《静かな海と幸運な航海》が演奏された。また、1839年の《荘厳ミサ曲》の演奏はドイツ初演であった。《交響曲第9番》は、1846年以後の「枝の主日」や「灰の水曜日」のコンサートで定期的に演奏された。

② ヘンデルとバッハの受容

「ドライシヒ・ジングアカデミー」のヘンデル受容は、1770年代のハンプルクでの先駆的な演奏や「ベルリン・ジングアカデミー」の《アレクサンダーの饗宴》(1807年)に始まる受容と比較すると遅い。オラトリオ演奏は《ユダス・マカベウス》(1820年)、《メサイア》(22年)と1820年代に始まり、《エフタ》と《サムソン》(35年)、《サウル》(37年)、《ベルシャザル》(38年)、《アレクサンダーの饗宴》(40年)、《エジプトのイスラエル人》(45年)、《ソロモン》(48年)と30、40年代に集中的に行なわれた。

メンデルスゾーンと「ベルリン・ジングアカデミー」の《マタイ受難曲》復活上演の影響を受けて、ドレスデンでは1833年3月31日、「枝の主日のコンサート」で同曲が演奏された。これを機に「ドライシヒ・ジングアカデミー」のバッハ受容が始まった。《マタイ受難曲》に加えて、モテトや

カンタータ《目覚めよと呼ぶ声あり》、《神は堅き砦》、《神の時は最上の時なり》などが好んで演奏された。《クリスマス・オラトリオ》は1858年、《ヨハネ受難曲》は1885年に演奏会のプログラムに登場した。

③ ナウマン、シヒト、ヴァインリヒ：地元の大家たち

ハイドンやヘンデルと並んで、初期の演奏会で頻繁に歌われたのはナウマン Johann Gottlieb Naumann(1741-1801)やシヒト Johann Gottfried Schicht(1753-1823)、ヴァインリヒ Theodor Weinlig(1780-1842)のミサ曲やオラトリオなど教会音楽であった。ナウマンは18世紀後半にドレスデン宮廷に仕えた宮廷楽長であり、シヒトはライプツィヒのゲヴァントハウスの指揮者やトーマス教会のカントルを務めた。ヴァインリヒはドレスデンの十字架教会のカントルで、「ドライシヒ・ジングアカデミー」の2代目指揮者でもあった。彼らはドレスデンやライプツィヒで高い社会的名声と尊敬を集めた指導的音楽家であり、いわば地方の「大家」であった。初期の演奏会では彼らの作品は繰り返し演奏され、なかでもナウマンの作品は支配的なレパートリーを形成したが、ヘンデル、バッハ、ベートーヴェンの作品が次々と受容され、強力なレパートリーを築き始めるとともに次第に消えていった。

④ メンデルスゾーンとシューマンの受容

メンデルスゾーン作品が1830年代よりレパートリーとなっていた一方で、シューマン作品の受容はかなり遅い。「ドライシヒ・ジングアカデミー」では1837年に《聖パウロ》、1847年に《エリヤ》が演奏されたが、それはいずれも初演の翌年であった。他方、シューマン作品は、70年代以降、すなわち「シューマン・ジングアカデミー」と共同で演奏会活動を開始してから、《薔薇の巡礼》(1871年)、《ゲーテの‘ファウスト’からの情景》(1875年)、《流浪の民》(1879年)、《楽園とペリ》(1887年)と徐々に演奏

され始めた。バッハ復活の功労者かつゲヴァントハウス指揮者であったメンデルスゾーンの社会的名声の高さを差し引いて考えても、このシューマン受容の遅さは、ロマン主義的要素の強い同時代作品に対する「ドライシヒ・ジングアカデミー」の消極的な態度を表わしていると推測される。

4. 結語

混声合唱協会「ドライシヒ・ジングアカデミー」が19世紀ドレスデンの公的音楽生活で担った最大の役割は、1810年代からの定期的な演奏会活動によって市民的な公開演奏会の基盤づくりに貢献したことである。本稿の考察からは、当協会が先駆的な市民的音楽制度として、1820年代から40年代の間に、他都市で既に高い評価を得ていたヘンデルやベートーヴェン、バッハ等の作品をドレスデンに紹介し、普及させる機関として活躍したことがわかる。しかし、評価の確定した作品を繰り返し演奏するという保守的な傾向が強かったために、1850年代後半から70年代、すなわちドレスデンで他の演奏会制度が確立しはじめた時期には、既にレパートリーの固定化が進んでいた。また、当協会には同時代の作品を積極的に取り入れる姿勢はあまり見られなかった。

以上の考察結果を出発点とし、今後はさらに、これらの演奏レパートリーを聴衆はどのように享受したか、また当地のジャーナリズムはどのような反応を示したか、という受容史的側面の考察を進めることで、ドレスデンの合唱協会が公開演奏会制度の確立過程において果たした役割を明らかにしたい。

注

- 1) 合唱協会やコンサートのレパートリーに関する種々の社会史的研究があるが (Irmen 1978, Mahling 1980)、ドレスデンの合唱協会についてのレパートリー研究はほとんどなされていない。
- 2) 協会の75周年、100周年の記念刊行物には国王への忠誠を示す献辞が記されている (DS1882, DS1907)。また、演奏会には王家一族がしばしば訪れた (DS1907: 50-77)。会員として、アインジーデル伯爵夫人、フォン・フリーゼン男爵、ボイスト男爵令嬢など政府高級官吏とその家族も参加していた (DS1882: 56-58)。
- 3) 「ドライシヒ・ジングアカデミー」の1832年の規約による (DS1832: 4)。なお、「ベルリン・ジングアカデミー」の規約(1816年)の第1条には、「当ジングアカデミーは、神聖でまじめな音楽、とりわけ厳格様式で書かれた音楽のための芸術協会であり、その目的は、メンバーの敬虔な心を高めるための、これらの作品の実践的な練習にある。」と記されている (Bollert 1966: 63)。
- 4) 初期の演奏会は半公開のものであったが、1855年から「聴くための会員 Zuhörende Mitglieder」が設けられた。このことはドレスデンにおいて、漸くこの時期に演奏会の環境が整い始めたことを示唆している。
- 5) 1810年代末から20年代のドイツ政府による自由主義弾圧の体制の下、ドレスデンでも協会創設が途絶えていたが、1830年のパリ七月革命以後、さらに1848年の三月内閣で出版検閲制度の廃止や結社と集会の権利が保障されると、協会設立のブームが訪れた。まず、「オルフォイス Orpheus」(1834年設立)と「リーダーターフェル Liedertafel」(1839年)が、続いて「リーダークライス Liederkreis」と「タンホイザー Tannhäuser」(1844年)、「ゲルマニア Germania」(1849年)、「アリオン Arion」(1849年)などの市民の男声合唱協会が次々と設立された。
- 6) 「シューマン・ジングアカデミー」の初期の活動については井上1998、その後の活動については井上1999を参照。

- 7) 「ドライシヒ・ジングアカデミー」と「ノイシュタット合唱協会 Neustädter Chorgesangverein」(1865年設立)が共同で76年に開始し、77年から「シューマン・ジングアカデミー」も参加した。オラトリオ演奏を主たる目的とするこれら3つの混声合唱協会は互いに「同僚協会」と呼び合っている。
- 8) 本文中の作品名の日本語訳は『ニューグローヴ世界音楽大事典』(柴田南雄；遠山一行(編)、1994年、東京：講談社)を参考に、統一した。
- 9) 19世紀前半のベルリンの演奏会における作品受容の様子は、マーリンクの詳細な演奏会リストに明らかである(Mahling 1980: 27-263)。ライマーは1800年から20年までのライプツィヒのゲヴァントハウス演奏会におけるモーツァルトとハイドンのシンフォニー・レパートリーについて報告している(Reimer 1986)。

文献表 (資料および引用文献)

DS1832= *Statuten der Dreyssig'schen Singakademie zu Dresden, entworfen und angenommen im Jahre 1832.* [規約]

DS1834, 1856-57, 1865-70

= *Verzeichniss der Mitglieder der Dreyssig'schen Sing-Akademie.*

(1834, 1856-57, 1865-70.) [メンバーと演奏曲目のリスト]

DS1882= *Geschichte der Dreyssig'schen Singakademie in Dresden. Zur 75 jährigen Jubelfeier derselben (6. März 1882).*

SEEMANN, Theodor (Hg.), Dresden: Gilbers'sche Königl. Hofverlagsbuchhandlung.

DS1907= *Geschichte der Dreyssig'schen Sing-Akademie zu Dresden. Zur 100 jährigen Jubelfeier (5. März 1907).* Dreyssig'sche Singakademie (Hg.), Dresden: Hofmusikalienhandlung von F. Ries.

BOLLERT, Werner (Hg.)

1966 *Sing-Akademie zu Berlin: Festschrift zum 175 jährigen Bestehen.*

Berlin: Rembrandt Verlag.

井上 登喜子

1998 「R.シューマンと『合唱協会』の活動」 『音楽学』44(1): 16-29.

1999 「19世紀ドレスデンの合唱協会と市民層—『シューマン・ジングアカデミー』と『リーダーターフェル』の合唱活動を通して—」

『人間文化論叢』第2巻: 21-32.

IRMEN, Hans-Josef

1978 ‚Das Oratorium in München und der Münchner Oratorien-Verein‘

Religiöse Musik in nicht-liturgischen Werken von Beethoven bis Reger.

WIORA, Walter (Hg.): 233-246. [Studien zur Musikgeschichte des 19.

Jahrhunderts, Bd.51] Regensburg: Gustav Bosse Verlag.

MAHLING, Christoph Helmut

1980 ‚Zum ‚Musikbetrieb‘ Berlins und seinen Institutionen in der ersten

Hälfte des 19. Jahrhunderts.‘ *Studien zur Musikgeschichte Berlins*

im frühen 19. Jahrhundert. DAHLHAUS, Carl (Hg.): 27-284.

Regensburg: Gustav Bosse Verlag.

REIMER, Erich

1986 ‚Repertoirebildung und Kanonisierung: Zur Vorgeschichte des

Klassikbegriffs (1800-1835).‘

Archiv für Musikwissenschaft 43: 241-260.

いのうえ ときこ

お茶の水女子大学大学院修士課程を経て、現在、同大学院人間文化研究科(博士課程)在学中。

主要論文:「19世紀ドレスデンの合唱協会と市民層—『シューマン・ジングアカデミー』と『リーダーターフェル』の合唱活動を通して—」(『人間文化論叢』、第2巻 [2000年]、21-32頁)、「R.

シューマンと〈合唱協会〉の活動」『音楽学』、第44巻 第1号 [1999年]、16-29頁)。